

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第10章 拡大する教会における祈り②



神の導きをいただく

神のみこころについての知識をいただく



神の導きをいただく

人々が真に祈るとき、神は耳を傾け、答えをもたらすに必要なあらゆる力を動かしてくださいます。その答えは時として、人々が指示を聞いて実行する準備が整っているかどうかによって左右されることがあります。サウロは、神のご介入により、イエスと自分自身の両方にしっかりと向き合う心の状態になっていて、自らを完全に明け渡していました（使徒 9:3-4 参照）。魂の苦痛の中で彼は祈りました。神は既に超自然的な介入をしておられ、彼の注意を引いておられましたが、同時に、謙遜な自分のしもべの一人アナニヤに、「立って、『まっすぐ』という街路に行き、サウロというタルソ人をユダの家に尋ねなさい。そこで、彼は祈っています」（使徒 9:11）と告げて、サウロの霊的な変革を完全なものとするために用いられました。祈りは多くのことを成し遂げます。しかし、神はしばしば、答えをもたらすために人を用いられるのです。祈りに答えてくださるに際し、私たちができないことは、奇跡的なご介入によって行なってくださいます。しかし、私たちにできることについては、しばしば私たちが用いてくださるのです。神の促しと指示とにアナニヤが聞き従うことがなかったなら、サウロはどうなっていたことでしょうか。また、絶望の中にある魂についても、しもべたちに神の啓示の担い手となる気が無かったり、準備ができていないがゆえに、みこころが届かないようなことはないのだろうかと思うのです。

サウロが祈っていたのは根本的に重要なことです。さらに、その場に人々を連れてくるという神のご計画も、

まさに必要なものであったと思われます。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる」(ピリピ 2:13) からです。サウロの祈りの結果は、人の理解を超えたものでした。この人ほど、みこころに完全に降伏し、キリストを世に伝えるという意味で強力に用いられた人はいません。アナニヤは、このサウロが正しい方向に進んでいくよう導くための神の使者でした。彼がサウロに語ったメッセージは、なんと励ましに満ちたものであったことでしょうか。「兄弟サウロ。あなたの来る途中、あなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです」(使徒 9:17)。しかし、(パウロとなった) サウロはそれ以上に、神のみこころに完全に支配された人物として、歴史上希有な人々の一人であったのです(使徒 22:14 参照)。

イエスに直接に出会い、この上ない誠実さをもって祈るなら、神が導いてくださることが期待できます。そして、神は、おそらくはご自分のしもべの一人を用いて導いてくださるのです。

神のみこころについての知識をいただく

ペテロがルダにいたとき、近くのヨッパという町に住んでいたドルカスという女性が亡くなりました。彼女は「多くの良いわざと施しをしていた」(使徒 9:36) 人でした。埋葬の準備のために友人たちがその体を洗い清めていたのですが、神が用いて奇跡を行わせているという評判のペテロが遠からぬ所にいると知り、来ていただけないかと使いを送ってきたのです。ペテロが赴くと、ドルカスの施しの恵みを受けていた泣き女たちが彼に殺到し、彼女の心の広さにどれだけ世話になったかという証しをするのでした。彼女らが、願わくは彼女を生き返らせてもらえないかと懇願したことも十分にあり得ます。

主のしもべならば、そのような求めにどう応答すべきでしょうか。こうした不可能な状況に直面して、どのように振る舞えばいいのでしょうか。ペテロの生来の性質としては、まわりつく未亡人たちを狂信的で気がふれていると払いのけ、彼女たちの悲しみと寂しさから逃げようとしたかもしれません。あるいは、ドルカスを生き返らせてもらえるかもしれないという望みに理性的な説明を与えて諦めさせ、単に慰めとお悔やみの言葉を与えようとしたかもしれません。しかし実際は、そのどちらでもありませんでした。代わりに彼は「みなのを外に出し、ひざまずいて祈った」とあります。「そしてその遺体のほうを向いて、『タビタ。起きなさい』と言った。すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起き上がった」(使徒 9:40)。

ペテロが取ったこの行動を理解するためには、彼が最初にイエスに出会った時からの歩みを辿ってみなければなりません。彼は最も早い時点で、イエスが十二弟子に教えるのを聞いています。

「行って、『天の御国が近づいた』と宣べ伝えなさい。病人をいやし、死人を生き返らせ……」(マタイ 10:7-8)。そして、主の御手によってなされる無数の奇跡を目撃しました。そこには、未亡人の息子(ルカ 7:11-16) やヤイロの娘(ルカ 41-42,49-56)、ラザロ(ヨハネ 11:1-44) のよみがえりも含まれていました。これらに加えて、ペテロはイエスから直接にその神性の啓示もいただいていた(マタイ 16:13-17)。変貌山では神の栄光を目撃してもいます(マタイ 17:1-7) し、復活後の主に個人的に会ってもいます(1 コリント 15:5)。さらに、まだ記憶に新しいペンテコステ後の体験がありました。神殿の門にいた足の不自由な人のいやし(使徒 3:1-9)

や、彼が不正と向き合っただのアナニヤとサツピラの不思議で突然の死（使徒 5:1-10）、あるいは直近の、彼の命令で8年の中風から立ち上がったアイネヤの体験（使徒 9:33-35）などです。このように見えてくると、ペテロが通常考えられるのとは著しく違う行動に出た背景が、少しは理解できるのではないかと思います。彼はイエスの足元に座っていた人でした。信仰から信仰へと歩んできた人でした。聖霊に満たされていた人でした。自らの祈りの答えとして、また神への従順の結果として、強大な力が働かれるのを目の当たりにしてきた人であったので。そのため、人の死に直面しても、整えられていたペテロは神にお伺いを立てるのに躊躇は無かったのです。

そのような深刻な状況であえて行動を起こす前に、ペテロは神に聞かなければなりません（40節）。ペテロにはまだ、神がこの奇跡を行われるとは示されていなかったからです。誰にも妨げられることのない熱心な祈りによって神のみこころを求めたペテロは、そのみこころを知るに至るまで祈り続けました。不可能なことをあえて行おうとする人には、それ以外の選択肢はないのです。みこころであるという強い確信から外れて事を行うことは、愚かさや恥、不名誉につながります。しかし、示されたみこころに照らし合わせて事を行うなら、それは純粋な信仰であり、神に素晴らしい栄光を帰することになるのです。ひとたびみこころが確実にわかったなら、後はそこに一致して行動するのみです。ペテロは女性の亡骸に向き直り、言いました。「タビタ。起きなさい」（40節）。すると、天で既に定められていた奇跡が、地において現実となりました。「すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起き上がった」（40節）。



なんと輝かしい回復でしょうか。実に素晴らしいものでした。しかし、それ以上のものでもありました。それは非常に多くの人々の心を開かせる鍵となったのです。「このことがヨッパ中に知れ渡り、多くの人々が主を信じた」（42節）。

神は、地上における私たちの悲しみや寂しさを深く気にかけてくださいます。そして、時には自然の摂理に介入をしてくださいます。しかし、神の主要な関心は、一時的なものにはありません。ペテロの祈りに答えられた理由がヨッパの多くの魂の永遠の運命にあったことは、疑う余地が無いのです。

ペテロの体験には、人の必要に応えるべく用いられたいと願う人々ならば学べる教訓が、多くあります。人間に不可能と思われることに直面した際には、神に聴き、みこころを学びましょう。そして信仰が試されている時には、頭だけで考えすぎないように気をつけましょう。また、思い込みで行動しないようにしましょう。行動する前には、御声を確実に聞くようにしましょう。絶対に不可能なことに対しては、神の語られた言葉を信じていることができるまで、信仰が育つのを待ちましょう。神が語ってくださったということが確信できたなら、恐れずに行動しましょう。奇跡が起こったなら、すべての栄光を神に帰しましょう。その超自然的なみわざにより、失われた魂が神のもとに導かれるようにするのです。